

このコーナーでは、防災に関する備えや避難時の注意など、日頃から災害に備えるための情報をスポットで発信していきます。

**被災地での活動を体験して**

問合せ／消防局消防総務課企画総務係  
TEL 20119

本市消防局から横浜市消防局に出向していた前畑芳樹消防士長は、1月21日から26日まで、令和6年能登半島地震の緊急消防援助隊として石川県に派遣され被災地活動に従事しました。  
被災地での活動状況や現場で感じたこと、市民の皆さんへ伝えたいことなどについてインタビューしました。

**活動を通して感じた  
日頃からの「備え」の大切さ**

今回活動した地域は、風光明媚な市域で雰囲気や人口などの規模感も本市と重なる部分がありました。災害が大きくなればなるほど、住宅の倒壊や火災が同時発生し、道路も崩れ、車両や資機材などの消防力が劣勢となることも想像され、日頃からの備えが大事だと改めて感じました。

例えば、  
①災害備蓄品の準備や自宅の安全点検などを行う。  
②1年に1回、家族で非常食を食べたり、水道水が使用できないことを想定したりして生活してみる。

このように、実際に経験して家族ぐるみで災害に対する意識を高めてみてはいかがでしょうか。



▲地滑りにより倒壊した家屋および活動現場へ向かう様子  
◀大きな地震が起きたときは通電火災にご注意！（政府広報オンライン）



**市民の皆さんへ**

被災地では、一瞬にして大切な日常が失われた自然災害の恐ろしさを目の当たりにしました。大規模地震発生時は、火災が同時に発生する可能性があり、中でも通電火災が発生する割合が高くなっています。

避難の際は、自身の安全確保を最優先し、使用中の電気機器のコンセントを抜いたり、ブレーカーを落としたりなどして避難することも対策の一つです。

いつ起こるか分からないからこそ、想定できる「最大限の備え」をすることで被害を軽減できますので、これを機会に再確認をお願いします。

**人のこころを  
越え**  
越地 成美さん



**「人のとなり」とは…**

文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人となり」をイメージしたコーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当てることを目的としています。

1月4日、薩摩川内市誕生20周年記念ロゴマークが刻まれた懸垂幕を市民広場でお披露目しました。  
そこで今回は、全国の応募の中から選ばれたロゴマークをデザインした、本市出身のデザイナーの思いに寄り添います。

**デザイナーとして**

もともと絵を描くことが好きだったという越地成美さん。専門学校を卒業し、デザイナーとして印刷会社で勤務した経験もあるそうです。

「デザインをするにあたって、出来上りを自分で見るのも一つの楽しみで、納得いくものが完成するまでの時間は大変だけど、デザインすることが大好きなので、そんなに苦ではない」と話します。

好きなことに関しては妥協したくないという越地さんは、「お客様の期待に応えることを第一に、その期待をさらに超えるような、良い意味で裏切ることができるようなものを作りたい」と自身のデザインに向き合う姿勢について教えてくださいました。

**20周年を一緒にお祝い**

本市が誕生して今年で20周年を迎えるにあたり、募集した記念のロゴマーク。

川内大綱引の綱をあしらった数字の20に、「次世代へつなぐ」という思いを込めてデザインしたという越地さん。ロゴマークの中には、大好きな臥龍梅や特産品のキビナゴ、蘭傘田池のベッコウトンボなどを盛り込んだといっています。

「ロゴマークの公募を知り、市



**市長と振り返る  
薩摩川内市誕生20周年**

vol. 2

今月は、いよいよスタートする20周年記念事業の見どころなどについてインタビューしていきます。

**市誕生20周年記念事業の見どころを教えてください。**

市長 全部見どころです！  
**何よりも楽しく**しなくてはいけないと思っています。アフターコロナで交流が復活してきている今、全市民、全世代、県内外、国内外の人が本市の20周年記念事業を楽しんでほしいということが一番の意気込みです。ミュージックフェスなどの若者が楽しめるイベントもあるのですが、多くの人と一緒にお祝いしたいです。



▲薩摩川内市誕生20周年イベント市ホームページ

**20周年記念事業に若者が楽しめるイベントもあるのですが、日常的に若者が集まるまちにするために、どのようなことをしていきたいですか。**

市長 若者の意見を聞きたいです。高校生の意見を聞くことができる。みらいアドバイザーが本当にいい機会になっていると思います。実際

**何よりも楽しく！**



▲みらいアドバイザーが提言している様子

問合せ  
本庁秘書広報課  
企画総務・広聴広報G  
(内線 4122)

に、「若者が集まって話をしたり、勉強をしたりする場所があったら良いのでは」という提言があつて、まさにその通りだなと。若者もいつでも見掛ける、そんなまちにしたいです。

今回は、これからの本市のことなどを考えるにあたって、若者ともっと話をしたいという市長の思いを知ることができました。次回は、そんな市長の描く未来に迫ります。

※本市では、持続可能で魅力的なまちづくりの推進にあたって、高校生の視点から意見・助言を求めするため、薩摩川内市みらいアドバイザーを設置しています。

誕生20周年を一緒にお祝いしたいと思った。また、さまざまな場面で女性が活躍している姿を見て、自分も何か頑張ってみたいと感じたそうです。それでもやりたい気持ちもありながら、応募するか迷っていた中で、やはり後悔したくないと思い、応募したロゴマーク。なんと、1週間で仕上げたそうです。

「デザイナーでそれぞれやり方は異なるが、自分の場合、思いついたキーワードやアイデアをメモ帳に書き留めることから始める。その後イラスト化して、パズルのように自分で作った素材を加えたり引いたりしながら、完成に近づけていく」と越地さん流のデザイン方法を教えてくださいました。

**我が子の存在**

そんな越地さんは、「子どもを早く寝かしつけて、夜な夜なデザインに没頭した。夫の客観的なアドバイスで、色味やレイアウトなど自分では気付くことができない発見ができた」と言います。

最初は全く違うデザインだったそうですが、「作業をのぞきに來る我が子を見て、ふと思っただのが、「次世代へつなぐ」という思いをロゴマークを通して伝えたいということだった」と言います。最初に比べ、色合いも

温かいものになり、全体的に優しい雰囲気の仕事になりました。そうです。

「デザインしたロゴマークが採用された知らせを聞いた時は、純粹にうれしかった。周りからの反響もあって、とても良い経験になった」と喜びの声も聞かせてくれました。

**生まれ育った薩摩川内**

「子どもが産まれてから、これまで以上に過ごしやすいまちだとより感じるようになった。子育てを含め、さまざまなサポートが充実していると感じる。20周年を迎える生まれ育った薩摩川内市を少しでも盛り上げることができて良かった」と郷土愛をにじませながら話してくれました。



▲懸垂幕お披露目式にて（市民広場）